

ケイパビリティとは

伝統的な厚生経済学では、貧困を財（衣食住、所得など）から得られる満足感である厚生
の不足として測ってきた。しかしアマルティア・センは貧困とは厚生では測りきれない問題である事
を顕かにした上で、厚生に代わる新しい「人間の幸せ」「人間社会の善」の基準である「ケイパ
ビリティ概念」を提示した。この概念は人間の幸せを決するものを、所得や財の量から、人間生
活の在り方、人間の社会活動の質、その自由度に焦点を移している。

i) 「ケイパビリティ（潜在能力）」と言う概念

ケイパビリティの定義は、『人が自ら福祉を実現する自由度¹』とも表現され、後藤は「諸財の
有する特性を個々人の財（特性）利用能力・資源で返還する事によって達成される諸機能の選択
可能集合²」とされる。

ここで言う生活の諸機能とは幸せな生活を構成する諸機能、『「適切な栄養を得ているか」「健
康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」
「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」³』などである。

人間は貧困の中で、自分の生活のどの部分（機能）をどう豊かにできるのかと工夫をする存在
である。しかしさまざまな生活財を目の前にして、どの財のどの特性を選び、どう活用できるの
かを工夫しても、貧富の差、障碍の有無、病弱、社会的立場、その社会の社会保障の水準などに
より、その人には実際には不可能な事も多く、手が出せない事が多いわけである。

たとえ同じ所得や財、物を手にしていても、その財を生かすための行動はその人の条件により
制約を受けるので、幅がある。この違いがケイパビリティの違いである。

同じ所得があっても、個々人の境遇（障碍の有無、貧富、社会的立場など）に制約をうけて、
それぞれ異なる豊かさしか実現できない人々の、実現可能な「未来の生活の豊かさ」がケイパビ
リティであり、その達成できない、不足の状態を貧困としている。

前述のように同じ財を目の前にしても、その人の生活する環境、条件によっては、現実に脱貧
困の為にその人に許される行動には違い、幅があって、同じとは限らない。

例えば知的障害があり自理弁識能力に問題があるとしても、その人の置かれた社会のシステム
がそれを補う制度や社会関係を持っているならば、彼のケイパビリティはより拡大できるであろ
う。そしてその家族の経済力、家族関係、障碍者への対人サービスの動向、当事者組織の力、そ
して社会の受け入れや社会保障の水準により大きく異なるであろう。

貧困とはケイパビリティ（潜在能力）の不足であり、社会制度はすべての人にケイパビリティ
（潜在能力）を拡大し、平等にするためにあるとしている。

¹塩野谷祐一/鈴木興太郎/後藤玲子編 『福祉の公共哲学』 P77 3行 東京大学出版会 2005
年5月30日

² 後藤玲子 アマルティア・センの潜在能力アプローチと社会保障 P 1
www.rengo-soken-or.jp/dio/No149/k_hokoku1.htm 0702/11

³ アマルティア・セン 『不平等の再検討』 P59 岩波書店 2000年12月

ii) 個人の境遇を反映するケイパビリティ

厚生主義的には、一定の所得は一定の厚生（満足）をもたらすとして論を進めているので、ここでは人々の生きる境遇、条件の違いを無視していると言えよう。しかしケイパビリティ概念では、人はその境遇（心身障害、病弱、出自、貧富等）により、それぞれ経済活動に制約をうけており、この境遇の違いが人間の幸せに大きな影響を与えている中心的な問題として注目する。

たとえばAさんとBさんの間で、障害や、病弱、学歴、貧富の差などの境遇の違いがある場合、移動できない、就職できない、家族を形成し難いなどの制約が生じて、同じ所得を活用したとしても、未来に達成できる豊かさ、幸せは同じとはならないであろう。

センは人の境遇からの財活用上の制約を反映する、人間の財活動上の自由度としてケイパビリティを定義する事により、個々人の境遇の違いを測り比べる事を可能にしたといえよう。このような「人間の幸せ」や「社会の善」の基準を社会政策のベースに置く事によって、個々平等では無い条件下で生きる人々の、その境遇からの社会的活動への制約を、政策的にどの人にどれだけ補償すべきかなどとして問題にできる訳である。

この関係を後藤はケイパビリティの要素となる（生活の）機能について「機能概念は、財の有する特性のみならず、財の利用によって達成される人の機能に注目する事によって、個人的諸条件の多様性を広く反映しうるような指標を構成する事、そのような指標を元に社会政策のベースとなる個人間の境遇比較を試みる事を可能とするのである⁴⁾」と説明している。

iii) 貧困へのケイパビリティ・アプローチ

所得に関する情報を媒介にするこれまでの貧困測度では、全ての社会の貧困を測り比べる事が出来る測度は特定できなかった。そこでセンは貧困への新しいケイパビリティ（潜在能力）アプローチをもって、様々な社会の特徴ある貧困を測り比べる事を試みる。

センの貧困へのケイパビリティ・アプローチでは、人間の社会関係を営み、財を活用する行動によって達成される豊かさが問題なので、人間行動の自由度を決定する個人の境遇（心身の障害、病弱、貧富）、そして地域社会、社会制度、教育水準などの社会政治的な情報を問題とする。

この事は貧困とは低所得ばかりではなく、多焦点的に理解すべき問題、不平等問題を含むと言う理解にそって、経済問題であって社会政治的問題である各国さまざまな焦点をもつ貧困の様相を、多様な領域の情報を媒介として捉えようとしているといえよう。

さらにケイパビリティ（潜在能力）概念は現在の帰結的な状態からどのように脱貧困出来るのかという未来展望である点で、帰結主義的ならざる判断基準と言えよう。

セン自身の「ケイパビリティの剥奪と言うよりいっそう広い視座の中に、社会的排除を埋め込む事」が重要なのである（*ibid.*,P46）⁵⁾』との指摘のように、様々な焦点を持つ地域性ある貧困の様相、そして社会的排除概念という時間的経過や社会関係性に焦点付ける新しい貧困などに対

⁴⁾ 後藤玲子「正義の経済哲学」P46 東洋経済新聞社 2005年8月

⁵⁾ 中村健吾 『欧州統合と近代国家の変容—EUの多次元的ネットワーク・ガバナンス—』P327
注 39 昭和堂 2005年10月

しても、多様な領域の情報を媒介として有効に接近出来る概念である。